

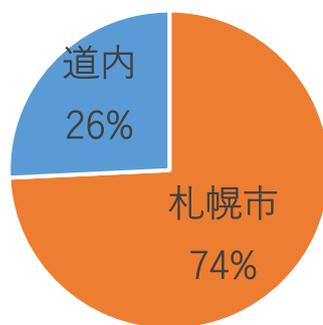
昨今、患者が初診での診察を希望しても予約がとりにくいという、待機期間の長さが全国的に深刻な問題となっている。当会では、この問題を少しでも解消し患者の利便性を高める目的で、ワーキングチームを結成し、対応策を検討してきた。今回、当会会員を対象に新患待機状況に係る実態調査を行ったため、その結果を報告する。

アンケート実施期間は2022年11月24日～2022年12月10日で、アンケート用紙は当会正会員（85施設、92名）のうち施設代表者の85名に送付し、66名からの回答を得た。回収率は77.6%であった。以下にアンケートの設問とその結果について示す。

施設特性

所在地

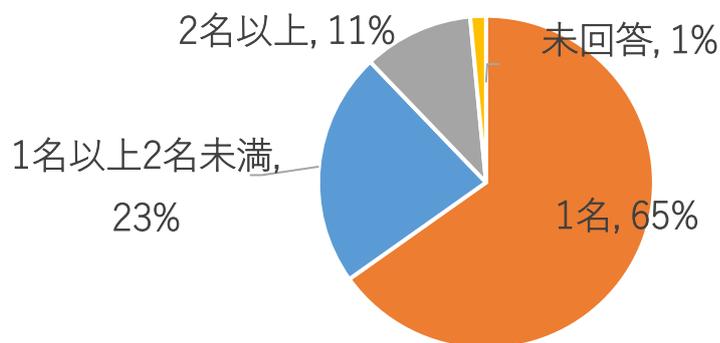
..... 市・町



調査用紙は、札幌市内57名に送付して49名、札幌市外の道内28名に送付して17名の回答を得ており、それぞれの回収率は86.0%、60.7%であった。

1日当たり医師数（全診療日を1に換算）

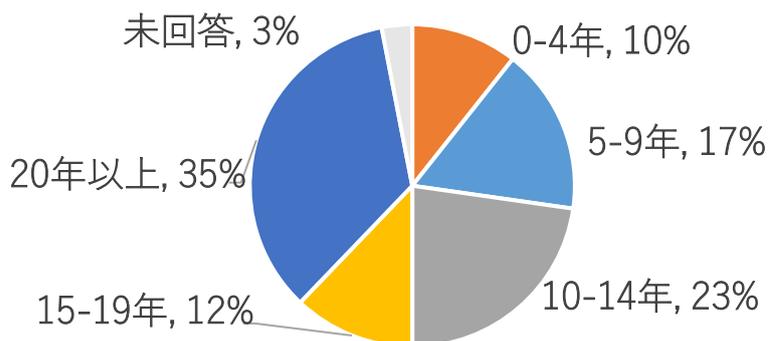
1. 1名 2. 1名以上2名未満 3. 2名以上



診療に従事する1日当たりの医師数は、1名が65%であり、非常勤を含む複数名は34%であった。

開院後の期間

1. 0-4年 2. 5-9年 3. 10-14年 4. 15-19年 5. 20年以上



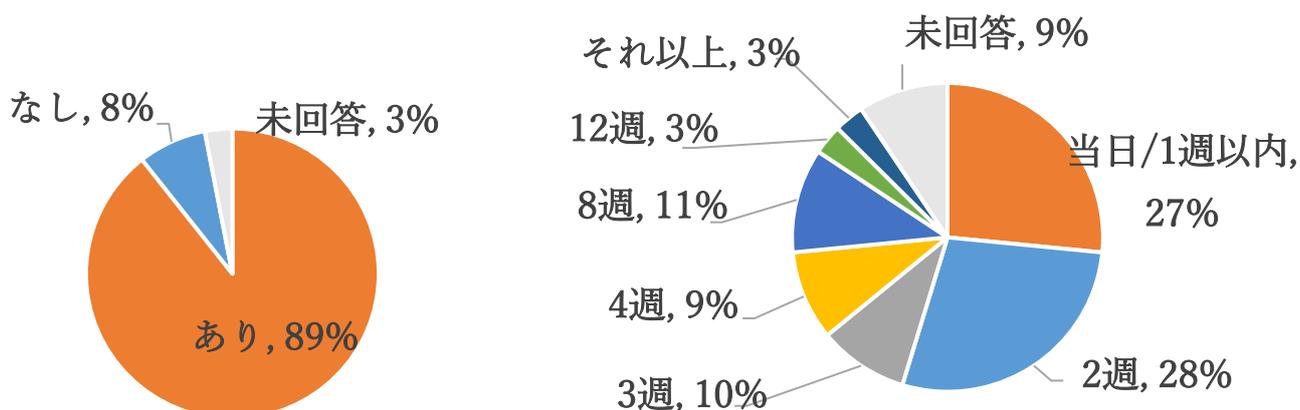
開院後の期間は、10年未満が27%、20年未満が34%、20年以上が35%と概ね10年毎に3分の1ずつに分かれていた。

現在の状況

通常の新患診察の有無

0. なし 1. あり

ここ3ヶ月の平均新患待機期間 1. 当日/1週以内 2. 2週 3. 3週 4. 4週 5. 8週 6. 12週 7. それ以上



89%が通常の新患診察を行っていた。そして27%が当日を含む1週間以内に新患の診察が可能と回答した。55%が2週間以内に対応可能と回答しており、過半数が2週間以内であった。74%が4週以内、すなわち1か月以内に対応可能で、8週を超える、すなわち2か月以上の待機期間と回答したのは6%にとどまった。

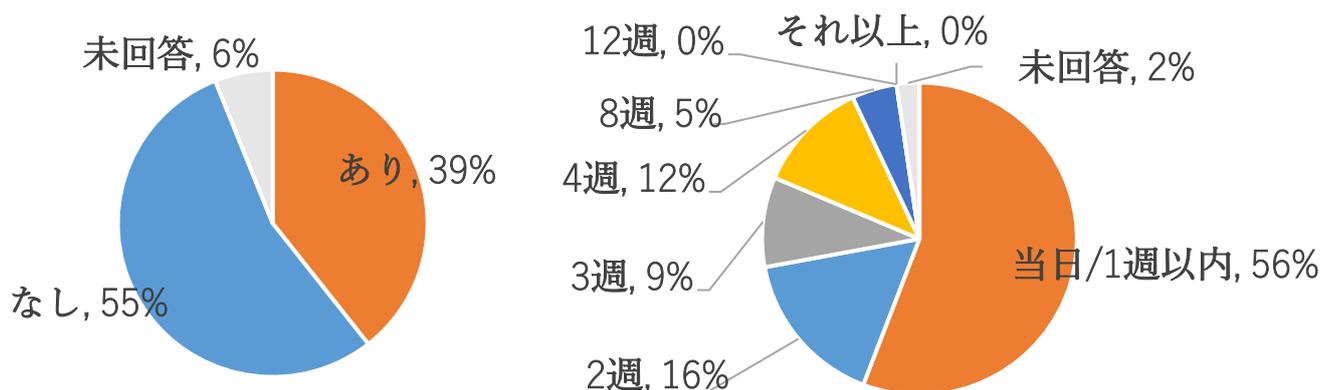
この結果は、我々が精神科病院の医師や他科の医療者、もしくは患者から聞かされる「予約が数ヶ月にわたりとれない」という話と若干矛盾するよう感じられる。すなわち、予約がとれる診療所がどこか分からないために問題が起こっている可能性を示唆するのもかもしれない。とすると問題の一部は、予約がとれる診療所ととりにくい診療所がどこなのか、我々からの情報提供が不十分であることに起因するのかもしれない。

紹介などによる特例新患枠の有無

0. なし 1. あり

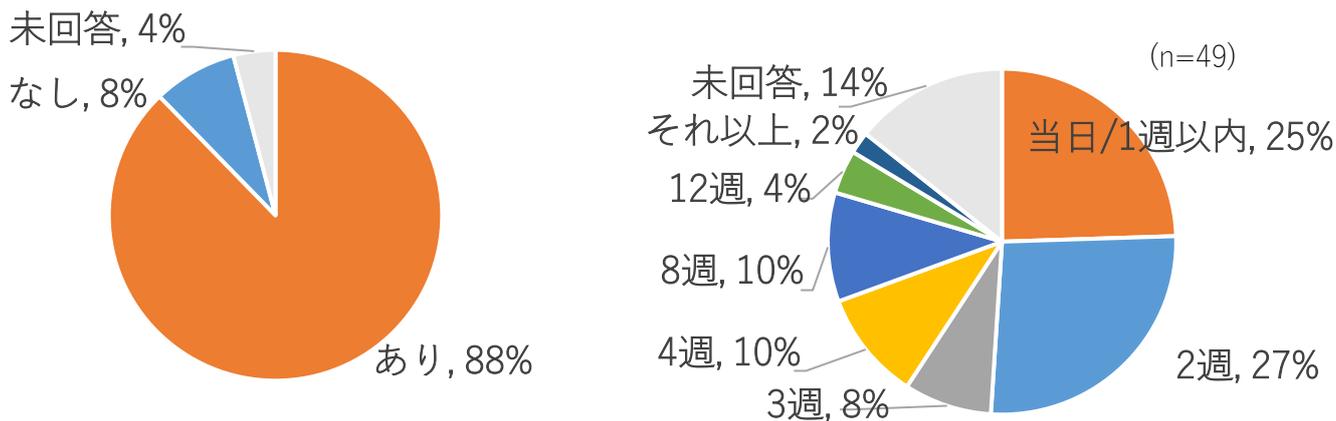
ここ3カ月の平均待機期間

1. 当日/1週以内 2. 2週 3. 3週 4. 4週 5. 8週 6. 12週 7. それ以上

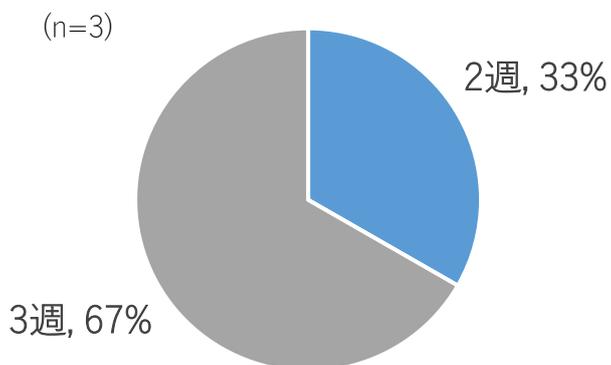


Dr to Dr や緊急など、特例への新患対応を行っているのは39%であり、その場合の待機期間は当日を含む1週間以内が56%と通常の待機期間よりも明らかに短縮していた。通常の新患診察の待機状況を地域別に見ると下記の通りである。

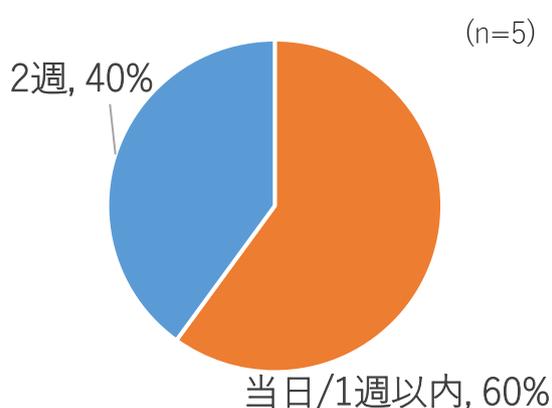
札幌市



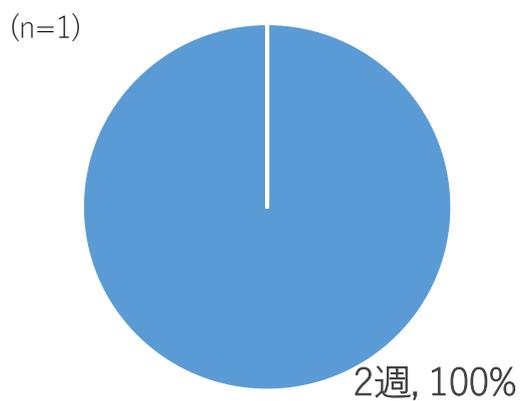
石狩（札幌市を除く）



渡島（函館市、北斗市、七飯町）



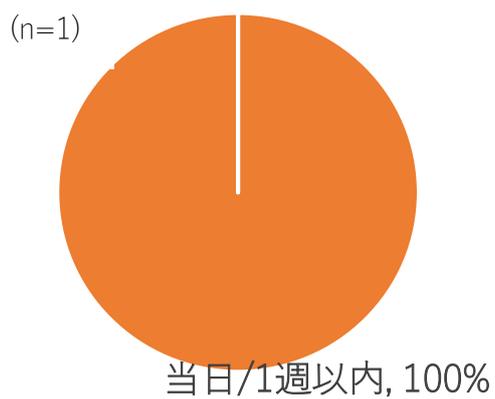
後志（小樽市）



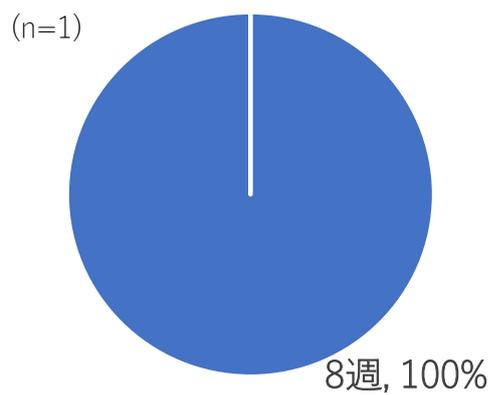
胆振（室蘭市、苫小牧市）

データなし

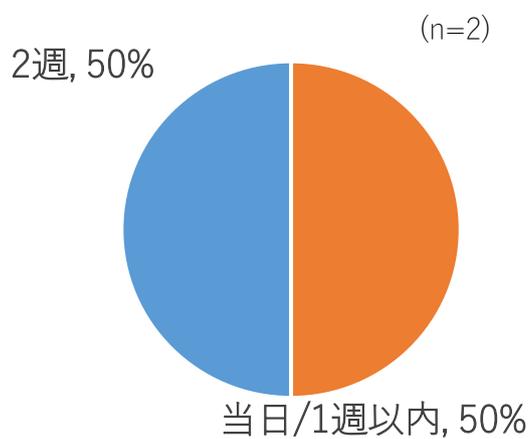
日高（浦河町）



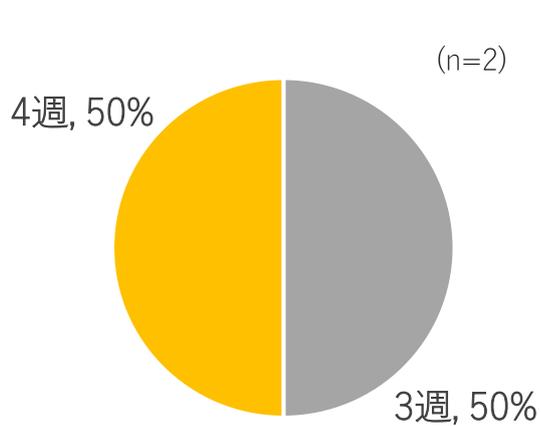
上川（旭川市）



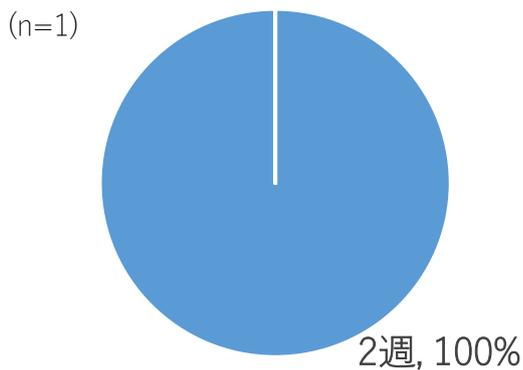
空知（岩見沢市）



十勝（帯広市、音更町）



釧路（釧路市）



道内の新患待機期間は札幌市内の待機期間に近似していたが、これは札幌市内の診療所の多さが関係していると思われる。一方、地方の待機期間は地域によってばらつきがあるが、診療所の数が少なかったり、また 1 ヶ所の診療所からしか回答が得られなかった地域も多くあることから、傾向を述べることは難しい。

ただ、単位人口あたりの診療所数が多い地域ほど、待機期間が短くなる可能性があるかと推測することはできる。

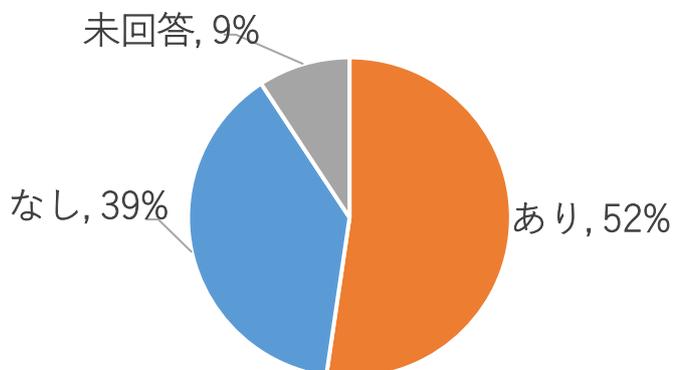
参考までに 2020 年現在の人口 10 万あたりの診療所数（心療内科を含む）は下記の通りである。（日本医師会 JMAP から）

全国 5.83、札幌 5.01、南渡島（函館） 4.45、後志（小樽） 2.51、南空知（岩見沢） 2.62、宗谷（稚内） 1.61、釧路 1.80、都会（帯広） 2.71、西胆振（室蘭） 4.53、東胆振（苫小牧） 0.97、日高（新ひだか） 3.16、上川中部（旭川） 3.67

すなわち、最も診療所が密集している札幌市でさえ、全国と比較すると診療所数が少ないことが分かる。

医師数も無視はできないものの、この診療所数の少なさが地方における新患待機期間の長さに影響している可能性もあると考えられる。

新患診察について、現在感じている問題 0. なし 1. あり
（具体的に記載してください）

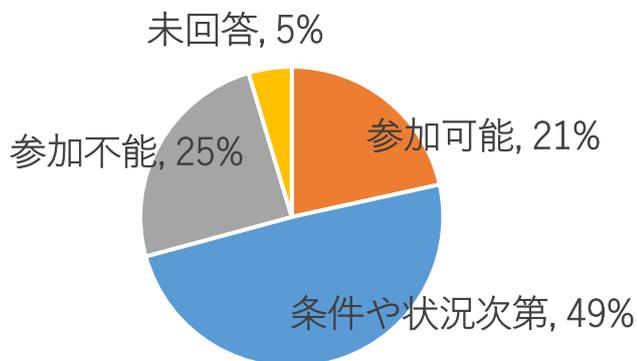


新患診察について何らかの問題があると回答したのは 34 名（52%）であり、そのうち代表的な意見をあげると、「即日希望の新患には全く応えられていない」（9 名）、「新患の無断キャンセル（いわゆるドタキャン、no-show）が多くて困っている」（8 名）、「自院のホームページで予告して一定期間分のみ予約を受け付けるなど変則的な方法を採用している」（5 名）などがみられた。

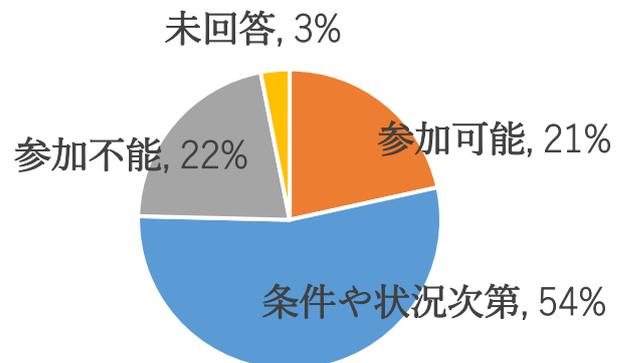
今後について

- ① 北精診が行う新患待機問題の検討 0. 参加不能 1. 条件や状況次第 2. 参加可能
② 新患待機改善システムができたときの参加意向 0. 参加不能 1. 条件や状況次第 2. 参加可能

①



②



今後北精診が実施する検討会議への参加意向、ならびに新患待機改善システムが完成した際の参加意向については、いずれも参加可能が 21%、条件や状況次第を含めると 70~75%が条件次第での参加意向を示した。

まとめ

今回の結果は大方の予想に反し、精神科診療所の初診までの待機期間が数ヶ月を要するという市中の噂とは乖離する結果となった。少なくとも 4 分の 1 の診療所で 1 週間以内の対応が可能で、また過半数が 2 週間以内での対応が可能であった。すなわち、患者にとって、早期に受診可能な診療所の情報が的確に伝わっていないことが考えられた。

昨今、SNS や口コミで医療機関の情報が取り上げられているが、ネガティブな情報が多く集まる一方で、ポジティブな内容は積極的に書かれない傾向があると言われている。口コミ対策を積極的に行っている診療所もあるが、全く気にせず無視している診療所も多い。この差が患者側からのアクセスの偏りを招いている可能性もある。

今後は、より多くの診療所の受診状況が適切に道民・市民に伝わるような方策を考えるべきと思われる。そのためには、当協会に所属しない診療所にも声がけし、入会とともに協力を依頼することも必要と思われる。

ワーキングチーム：足立直人、伊藤匡、佐々木竜二、高橋義人、新田活子（五十音順）